九州大学学術情報リポジトリ
Kyushu University Institutional Repository

『通学合宿・生活体験の勧め』　正平辰男　著

玉井，康之
北海道教育大学釧路校教育科学科

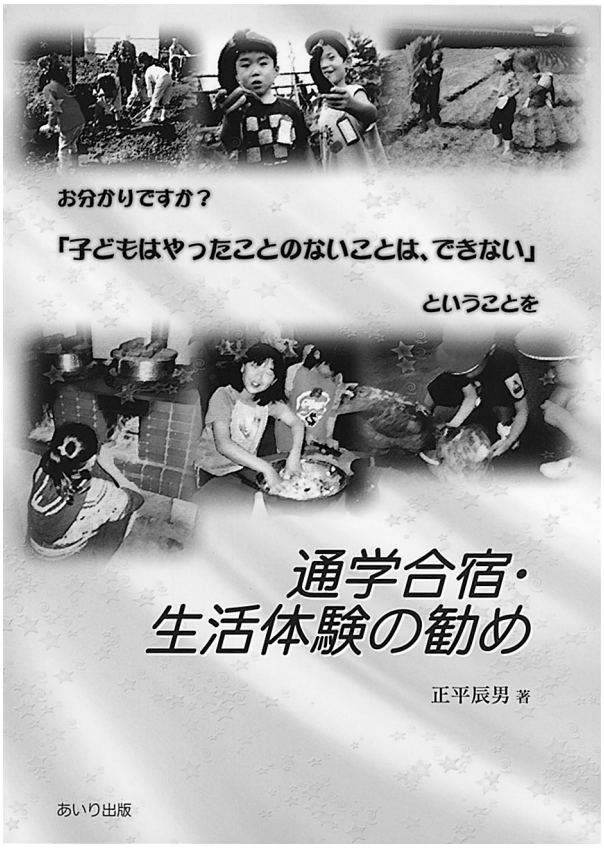
https://doi.org/10.15017/9086

出版情報：生活体験学習研究. 7, pp.59-60, 2007-03-31. 日本生活体験学習学会
バージョン：
権利関係：

日本生活体験学習学会誌　第７号　59－60（2007）

『通学合宿・生活体験の勧め』

正　平　辰　男　著



高度経済成長以降、生活環境の近代化や価値観の変化に伴い、子どもの生活体験の欠如が急速に進行した。そして高度経済成長以降の子どもたちが現在は親になり始めている。その親たちが生活体験の重要性を実感しないまま、子どもたちにも生活体験や人間関係の苦労をさせずに、ますます生活能力や人間関係能力の低下をもたらしているという現実がある。

このような中にあっても、生活体験の欠如を補う機会がなかなか作り出せないでいるのが現状である。一方近年急速に広がりつつある通学合宿は、山村留学に比べて、比較的どの学校・地域・社会教育施設でも、取り組む気になれば、実施可能なプログラムである。このような通学合宿は、今後生活体験を子どもたちに浸透する上で極めて有効な方法となりえる。この通学合宿の研究は、未開拓の分野といえるが、その先鞭をつけたのが、まさに本書『通学合宿・生活体験の勧め』である。

本書は、３部構成からなる。第１部「生活体験学校・通学合宿の考え方と歩み」では、1983年に福岡県庄内町で始まった「通学キャンプ」を出発点にして、現在の通学合宿に発展するまでの変遷をとらえながら、通学合宿の基本理念と方法を明らかにしている。

通学合宿の意義は多面的に広がってきているが、当初から目指した主な目的は、働くことを教えること、してはならないことなどの自明のことを教えること、他人とともに暮らす喜びと苦しみを教えること、関わりを持つ地域住民の人間関係や連帯を回復すること、が主な目的であり、このことは現在の生活体験学習一般の意義にもつながるものである。

庄内町の通学合宿は、元々生活体験を行う事業として開始されたものであるが、幾多の試行錯誤を経て、1988年には、町立の社会教育施設として設置され、ソフトとハードを統一する先駆的な生活体験学校として定式化されている。

生活体験学校の通学合宿メニューとしては、自炊・洗濯・風呂沸かし・掃除・朝夕読み・鶏卵取り・野菜収穫・動物えさやり・生徒の徒歩通学、などを必須プログラムとして取り入れている。さらに追加プログラムとして、畑作業・厩舎等の作業・堆肥作り・椎茸作業・タマネギ収穫・塗装・布団干し、などが加わる。

一方、してはならない決まりとして、お菓子などを持ち込むこと、徒歩以外で通学すること、ゲーム・マンガ本を持ち込むこと等を禁止している。また生活の中での基本的な規律として、大人の話をよく聞くこと、自分の役割・仕事をすること、汚れることをいとわないこと、自分で起きること、自分で考えること、挨拶をすること、仲間の仕事を助けること、仲間を傷つけないこと、などを規律として指導している。

このような体験と指導の内容は、本来的には家庭や学校でなされるべきことであるが、幼少期から地域の中で集団的に遊ぶ経験や家庭の中で厳しく指導された経験がない子どもにとっては、全く未知の体験となる場合がほとんどである。それだけに通学合宿は、短期間であっても日常的な生活の中で具体的な行動様式が解決できるために、極めて教育効果が高いと言える。

このような子どもの変化を目の当たりにして、保護

者も生活態度や生活能力などのしつけの重要性を考えさせられる場合も多いことが指摘されている。子どもの指導は、間接的に家庭教育力の向上にもつながっていると言える。

第２部「生活体験学校・通学合宿のスケッチ」では、具体的な各体験場面における子どもの声を把握しながら、具体的な体験活動の教育効果をそれぞれとらえている。

例えば「通学合宿編」では、「お家へ帰りたい」と嘆く子どもの様子の変化から、保護者と離れて暮らすことがいかに子どもの自立にとって重要であるか、また保護者と離れることの悲しさの中で、いかに親のありがたさも感じるようになるかを示している。

「学校と地域の連携編」では、地域の中で様々な活動をすることによって、子どもたちが色々な大人や上級生と関わり、その中で人間関係能力を広げていく役割が示されている。また教師もそのような中で、子どもの発達を生活を含めてトータルにとらえられるようになっている。

「動物編」では、動物と関わることによって、命の大切さや命を育てることの苦労を感じ取ることができることを示している。そのような体験をした子どもはやはり命を大切にすること、そして人間を思いやることにつながっている。

「ドングリ・炭焼き」編も、植物と自然の再生産に関わることによって、環境と自然の再生産活動を考えることにつながっている。それはさらに、自然と食と人間の再生産という環境教育にもつながるものである。

「生活文化交流編」では、木工・建設・加工を通じて、生活に必要な環境を創造することや、加工によって、よりよい生活が可能になることを学んでいる。食と生活は加工する能力に依拠する部分も大きく、与えられた環境を自分で創造的に工夫する力につながっている。

第３部「生活体験・通学合宿を考える」では、庄内町で始まった通学合宿がさらに広まる経過と発展性をとらえている。庄内町の通学合宿の取り組みは、福岡県教育委員会も注目し、福岡県内において波及できるように啓発している。そのことが福岡県で普及する契機となった。

さらにそれが全国的にも広がり、現在約250の自治体で取り組まれるようになった。これらの取り組みは、さらに自治体間・実践者間で交流することによって、それぞれの経験知が普遍的な理念と方法論を確立していく条件となることを指摘している。

また通学合宿が発展する条件として、ボランティアとの連携や、教育行政との連携も重要な条件となるものであり、さらにこれを教師・学校にも理解してもらいながら発展していくことが指摘されている。このような発展の条件が示されることにより、今後一層の発展が期待できる。

このような庄内町の通学合宿は、通学合宿のみならず、山村留学における体験内容や生活のきまりの方法などにも応用できるものであり、今後あらゆる生活体験の普及と生きる力の向上にとって重要な示唆を示していると言える。本書は、まさに通学合宿研究の最初の研究書であり、生活体験の先駆的な内容を示していると言える。本書が多くの社会教育関係者・学校教育関係者や山村留学関係者に読まれることを期待している。

［あいり出版、2005年、2500円＋税］

（北海道教育大学釧路校　玉井　康之）